妖と夜叉 コラボ篇

霜月サヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖と夜叉　コラボ篇

【Ｎコード】
Ｎ３４２１Ｚ

【作者名】
霜月サヤ

【あらすじ】
『妖と夜叉』のコラボ篇です。他作品や作者とのコラボのみとなっています

はじめに（前書き）

前書きでは、会話文を載せます。

リオ
「」

という表記です。
また、作者も混じり込みます。

はじめに

はじめに

こちらは『妖と夜叉』のコラボ篇となっております。
ヒロインの詳しい設定は、『妖と夜叉』の方をご覧ください。

簡単にヒロイン設定を紹介
ヒロイン（奴良リオ）は、リクオの双子の姉です。

コラボ篇では、他作品や作者とのコラボをしていきたいと思います。
基本的には1話ごと完結としたいですが、続く場合があります。

またコラボ篇では、キャラ崩壊が目立ちます。
その辺はご了承ください。

それでは、コラボ篇は次話よりスタートです。

募集をかけよう！（前書き）

リオ
「大丈夫なの？これ…」

霜月サヤ
「いや、全然」

銀時
「お先真っ暗だな」

霜月サヤ
「今回は短い」

募集をかけよう！

県内某所にある霜月サヤの宅

「手始めに、コラボしてくれそうな人をかき集めることだよね」

「いや、サヤ。いきなり無計画なことをおっ始めるな」

「そうそう。完璧に無計画だとバレバレじゃない」

「いや、アンタらのセリフでバレていますけど」

新八がツッコミを入れる。

「大体、コラボ篇やろうと思ったの、他の作者がコラボ話をやっているのを読んで、やりたいって思ったためダロ」

「ぐ…」

「図星だな」

図星を突かれて、言い返す言葉も出ない作者。

「無計画にスタートしたから、どんな内容とか決めていないでしょ」

「それに、だ。『妖と夜叉』の続編も考えねぇといけないだろうが」

「無計画にも程があるネ」

「いんだよ！コラボ篇は、めっちゃ気まぐれにやるんだから！！」

「まぁ、とりあえず、コラボしてもいいよっていう人は教えてください」

「作者がバカなりに、頑張るからってよォ」

「期待するなヨ」

無計画にやると自分の首をしめるよ（前書き）

リオ
「何？このタイトル？」

銀時
「霜月（コイツ）サヤを見ればわかるだろ」

霜月サヤ
「……」

リオ
「あぁ…タイトル通りになったのね、サヤ」

霜月サヤ
「……」

コツコツ…

銀時
「……再起不能になっているな」

リオ
「おもいっきり固まっているわ…」

無計画にやると自分の首をしめるよ

県内某所、霜月サヤの宅

「おい、サヤ」

「ん？」

「どうするんだよ、話」

「考えていない」

「考えろやァァァァ！」

「ふにゃ…ッ！」

バーンと頭を叩かれ、痛む霜月サヤ。

「大体、無計画に始めてしまったのがいけないアル」

「それに、他の作者のオリジナルキャラ、ちゃんと口調とか掴めるの？」

「……頑張る…」

「で、決めたのか？内容」

「すぐに決められないって……」

「とにかく、待っている人もいるんだから、ちゃんとやってね」

「おぅ……」

「リオ。もう、サヤのやつ、パンクしている」

「銀ちゃん、次回からコラボなるアルカ？」

「そいつは、サヤ次第だ」

「え～、勝手に宣言しちゃいます！次回から、蘿蔔さんのオリキャラらとコラボ！」

リオが堂々と言い放った。

「ちょっとォォォォォォ！？」

「ごちゃごちゃ煩いアル」

「順番を考えれば、わかるだろ」

「サヤは、全く考えていないから、時間かかるよ」

「というわけで、次回お楽しみに」

「ギャァァァァァ！マジで考えないとヤバいじゃん！！」

コラボするする詐欺じゃないから！まだ　話が出来ていないだけだから！！（並

霜月サヤ
「あ～あ、スタートしちゃった…」

リオ
「話が出来たわけじゃないのにね」

銀時
「まぁ、持続編のストックが全然ないのに、完結しちゃいそうだからな」

霜月サヤ
「そうそう。ヤバいよ…マジでヤバい…」

リオ
「本当に、お先真っ暗だわ…」

銀時
「それじゃあ、本文スタートだ」

コラボするする詐欺じゃないから！まだ　話が出来ていないだけだから！！

かぶき町にある万事屋銀ちゃん。
一言で言えば、何でも屋という仕事ゆえに、今日も依頼は来ていない。

「銀さん、神楽ちゃん、掃除の邪魔なんですけど」

「あ、新八。いつものアレ取ってきて」

「私もネ」

「自分で取ってきてくださいよ！」

「んだよ、ダメガネが」

「ダメガネのくせに、反論するアルカ」

「ダメガネ関係ないでしょうが！！……はいはい、わかりましたよ！」

取ってくればいいでしょ、取ってくれば。と言いながら、新八は台所へ向かった。

これが万事屋での日常茶飯事であった。

◇　◆　◇　◆　◇

同時刻、真選組屯所内では、例によってリオと沖田が土方殺しを行っていた。
例えば、バズーカの挟み撃ちや好物にタバスコやら、いろいろとだ。
リオと沖田が組んだ時期については、『妖と夜叉』第四十三訓の前書きを見るといい。

「「……ちっ」」

「テメェら、いい加減にしろォォォォォォォ！！」

「絶対、イ・ヤです！」

「同じくですぜェ」

笑みを浮かべる2人。（そのうち1人は、確実に黒い笑み）

その都度に土方は思った。リオを総悟のところにしたのは間違いだった、と。

◇　◆　◇　◆　◇

そんな万事屋と真選組のところに、招待状のようなものが送られてきた。
その招待状こそが、今回のコラボで使用される会場への案内状であった。
ちなみに、その招待状の送り主は、この作品の作者である霜月サヤである。

招待状の案内を頼りに、会場へ着いた万事屋と真選組。

そこで待ち受けるのは、一体何なのか…？

只今、無計画にコラボ中（前書き）

リオ
「いい加減、考えたら？」

霜月サヤ
「頑張って考えているけど…」

銀時
「全く浮かんでこないってわけ？」

霜月サヤ
「にゃはははは……はぁ～……とりあえず、本文スタートします」

只今、無計画にコラボ中

今回、用意された会場にいたのは、招待状を送りつけた作者こと、霜月サヤであった。

「……何やっているの？アンタ」

「早く持続編のストック作りしたら？こんなところにいないで」

「るせぇぇぇ！ストック作りたくても、話が浮かばねぇんだよ！！」

「キレるんじゃねェェェェェ！！」

怒鳴りツッコミをされる、サヤ。

「大体さ…ヤバいって思っているよ、マジで……
持続編やるって宣言したからには、やらないといけないし……
年賀企画の絵も、まだ終わっていないし……
このコラボ篇も、全く考えていないままスタートしちゃっているし……
番外編も考えた方がいいし……
前書き用の話のネタも作らないといけないし……
本家サイトのぬら孫の夢連載の『妖の世界』の続きも書かないといけないし……
できればクリスマス用のもやりたいし……
今週の土曜日は教習所だし……
その翌日はジャンフェスだし……
銀魂ステージ見れるし……あ～、忙しいな～」

「ちょっと待てェ！最後あたり、プライベートじゃねぇか！？」

「しかも、最後のは自慢！？」

サヤの長い愚痴に、突っ込んだ銀時とリオ。

「全く考えていないままスタートしているのは、サヤ自身が悪いアルヨ」

「無計画って恐ろしいでさァ。……俺は、いつも土方抹殺計画していやすけど」

「オイ総悟、聞こえてるぞ」

「ありゃ？おかしいなァ、ボソッと言ったはずですかねェ」

「総悟ォォォォォォ！」

沖田の一言に、土方はキレて追いかける。

そして、二人の姿は小さくなった。

「それで、こうダラダラと？」

「え、あ、うん」

「今回のコラボゲストはまだなんですか？」

「あ～、それは…」

言葉を濁すような口ぶりであった。

それもそのはず、なぜなら

「「「「「こんにちは」」」」」

来たからだ、今回のコラボゲストが。

「「「「！？」」」」

驚くメンバー。

そしてサヤは

「あ～、来ちゃった……どうしよう…」

ぼやいていた。

物語を考えずに進めること　これって有り？（前書き）

リオ
「グダグダだね…」

銀時
「いい加減、大まかな内容を作れよ」

霜月サヤ
「浮かばないんだって…とりあえず、口調とか合っているといいな…」

リオ
「本文スタートです」

銀時
「ついでに『妖と夜叉』でキャラクター人気投票やっているからな。投票よろしくな」

物語を考えずに進めること　これって有り？

前回、ついに来た今回のコラボメンバー。
そして、その内容は……

「まったく考えていないけど？」

「オイィィィィィ！！前回の更新から、だいぶ日付経っているのに考えていないんかいィィィィィ！！」

「るせぇな、ぱっつぁん！！１２月だよ！師走だよ！！忙しいんだァァァァァ！！」

「堂々と言うことじゃないだろうがァァァァァ！！」

「ゲストの前で言い争いするんじゃねぇよ！！」

言い争いをするサヤと新八に、リオが止めた。
新八にだけ殴りも入れて。

「なんで、僕だけ？」

「察しろよ、新八。作者のサヤにもやってみろ。今後、空気化だぜ？」

「それだけは避けたいアルヨ」

「ただでさえ、ゲストも含めると人数が多いからね」

「つーわけで、今回のコラボメンバーども。自己紹介しろ」
銀時の言葉で、ようやく今回コラボするメンバーの自己紹介が始まる。
「僕は由利(ゆり)と申します」
「私は由亜(ゆあ)と申します」
「俺は遊馬(ゆま)です」
「私は悠宇(ゆう)といいます」
「そして、わしが蘿蔔(すずしろ)です」
「ちなみに、蘿蔔が今回のコラボの代表者ね」
サヤが付け加える。
「んで、サヤ。コラボ内容はどうするんだ？」
「適当にやればいいんじゃない？」
適当にやればいい発言に、全員が固まった。
「いくら何でもそれは……」
「ないアル」
「というか、人数が多すぎて誰がしゃべっているのか、わかりにく

い……」

「確かに……正直言っちゃうけど、これ打ち込んでいて誰をしゃべらせているのか、私自身わからない」

「オイィィィィィィ！作者ァァァァァァ！！いくら何でも、それはないだろう！？」

「いやいや、あるよ～。これ、読んでいる人も一体誰がしゃべっているのか、わからないんじゃない？」

「そうだね。だって、読者には伝わっていないかもしれないけど、前回、途中退散になった副長と隊長もいますからね」

「土方コノヤローが空気化するのは構いやせんが、俺は忘れないでくだせェ」

「総悟ォォォォォ！テメー！！」

「あ～あ、また収拾がつかなくなったよ……」

そう言うサヤ。

「で、そういうサヤは、いい加減、コラボ内容決めた？」

「……なんでもトークで」

「今、思いついた感じアル……」

次回より、なんでもトークのスタート！！

「大丈夫かな…今回のコラボ…」

「大丈夫じゃねぇだろ…コラボゲストを空気化するぞ…絶対…」

「だよね……銀時」

無計画に進むコラボ篇に、心配するリオと銀時であった。

コラボって言ってもな…所詮自己満足なんだよ（前書き）

霜月サヤ
「タイトル…気にしないでください…」

リオ
「全然進まないね」

銀時
「つーか、これよりも本編の持続のストック作れよ」

霜月サヤ
「短いけど、２話分はできているよ！流れは浮かんでも文章にできていないの！！時間がないの！！」

リオ
「午前は、ほとんど教習所で潰れているのよね」

銀時
「んの割には、他人様の作品を読んでいるんだよな。感想を書いていないみてぇだが」

霜月サヤ
「ぐ…忙しいのは事実だもん！」

リオ
「……本編、行きます」

銀時

「まだ『妖と夜叉』では、人気キャラクター投票をやっていま～す。
今日やったら、明日またやるみたいにやれるからな！」

リオ
「今のところ、銀時が1位みたい」

コラボって言ってもな…所詮自己満足なんだよ

なんでもトークって言っても、テーマがなければグダグダになる。

「というわけで、トークのテーマを決めよう！」

「何が“というわけ”だァァァァ！」

「トークじゃなくて、ゲームしろよォォォォォ！」

「その方が、すぐに終わるネェェェェェ！」

「ギャァァァァァ！！」

万事屋メンバーに、ボコボコにさせられるサヤ。

「じゃあ、トークじゃなくてゲームね」

「リオ、ここはアレですかねェ」

「そうだね。せーの」

「「叩いて被ってじゃんけんぽん大会！」」

「説明しよう。叩いて被ってじゃんけんぽんとは「説明しなくていいわァァァァ！」」

「オイ、総悟。チーム分けはどうすんだ？」

土方は、とにかく終わらせたいようだ。
「そういえば、全部で何人いるの？」
「5人対5人でいいんじゃない」
「チーム分けは、対ゲストでいいだろう」
「面倒だしね」
「じゃあ、誰が不参加というか審判する？」
「私、作者は抜けます」
「サヤと私でいいかしら？」
リオがみんなに聞く。
そして、全員の同意が得られた。
「というわけで、次回は叩いて被ってじゃんけんぽん対決！」
「今回は短いな、オイ」
「もし、対決の組み合わせ希望あったら教えてくださいね！」
「話を聞けェェェェ！」
果たして、叩いて被ってじゃんけんぽん大会の行方は？

「ホント…誰が喋っているか、わからなすぎるだろ……」

「台本風にしたくないんだから、しょうがない」

「だったら…もうちょっとわかるようにしろや」

「私も誰を喋らせているのかわからない」

「オイィィィィィ！？」

ゲームの開始！…の前に（前書き）

霜月サヤ
「明けましておめでとうございます！今年もよろしくお願いします！」

リオ
「正月の間に挨拶できてよかったね」

霜月サヤ
「ま、ブログやら活動報告で、元旦に挨拶したけどね」

銀時
「しかも、俺たちの会話文付きで、だろ」

リオ
「というか、それを番外編の方でやればよかったのに」

霜月サヤ
「面倒じゃん」

リオ・銀時
「「……」」

霜月サヤ
「んで、今のところの人気キャラクター投票だけど…」

リオ
「相変わらず銀時が1位なんだよね」

銀時
「ま、でも、リオは2位だろ」

霜月サヤ
「2位以下が接戦ですな」

リオ
「そうね。複数投票可だし、毎日投票可だもんね」

銀時
「つーわけだから、まだ投票してねぇ奴、投票し続けたい奴は『妖と夜叉』に、人気キャラクター投票のリンクがあるからな」

霜月サヤ
「というわけで、今年もよろしくお願いします！」

ゲームの開始！…の前に

叩いて被ってじゃんけんぽん対決のスタートしようとした時だった。

「あら？皆さん、こんなところに集まってどうしたんです？」

「姉御！」

「……（呼んでもいない人が来ちゃったよォォォォォ！！）」

内心叫ぶ、作者こと霜月サヤ。

「お、お妙さん…あの…なんで、ここに？」

「あら？来てはいけなかったかしら？」

「いえ！そんなことありません！！」

「あ、そうだわ！お土産に卵焼き作ってきたの」

「…！！」

お妙の言葉に、全員が絶頂した。

「（あぁぁぁぁぁ、絶対こうなるから呼ばなかったのに…！）」

「（妙の奴、どうやって知ったんだよ）」

「（新八くんのせいじゃないかしら）」

「（ぼ、僕のせいですかァ！？）」

「（考えてみろよ。同じ家に住んでいる者だぜ）」

「（そうアル。そこらに置いていたら普通に見つかるネ）」

「（す、すみません…）」

「銀さんたち、何をコソコソと話しているんです？」

笑顔で問う妙であるが、問われた銀時たちにとっては素敵な笑顔ではなく黒い笑顔にしか見えなかった。

「いえ…なんでもないです」

「そうですか。食べます？卵焼き」

真っ黒になっている卵焼きを食べさせようとする妙。

とその時だった。

「お妙さぁぁぁぁぁぁぁぁんんんん！！」

「あ…」

聞き覚えのある声に反応したリオ。

その聞き覚えのある人物が、妙のところに着くと同時に

「現れるんじゃねェェェェェ！ゴリラァァァァァァ！！」

「グフッ！！」

妙によって殴られ、気絶した。

「「近藤さん！！」」

「…なんで近藤も来ちゃっているんだよ…」

ボソッと言ったサヤ。

「えと、お妙さん。その卵焼きは預かりますので、お仕事に行ってください」

「あら、やだ。もう、そんな時間かしら」

「ええ」

「わかったわ」

と、ここで妙はスナックすまいるに行く為に帰った。

「グッジョブ！もう、誰を喋らせているか、本当にわからないけど」

「オイィィィィィ！！そういうことを暴露するんじゃねェェェェェェ！！」

「お妙さんの乱入によって予定されていなかった近藤さんも来ちゃったし…人数増えちゃったよ…」

「というか、ゲームは？」

「叩いて被ってじゃんけんぽん対決は、次回になっちゃうね」

「蘿蔔さんのリクエスト通りの組み合わせになりま～す」

「つーわけで、次回な」

「ゆるすぎだろ」

新八が一言ツッコミ、対決は次回へ。

今度こそゲームの開始！になるのか？（前書き）

霜月サヤ
「お待たせしました！」

銀時
「誰も待ってねぇよ」

リオ
「無計画に始まり無計画に終わったね、今回のコラボ」

霜月サヤ
「強制的に終わらせちゃいました。そして、口調とかが合っているかが不安です」

銀時
「そんなわけでスタート」

今度こそゲームの開始！になるのか？

叩いて被ってじゃんけんぽん対決のスタート！！

「と言ったが……何これ……叩いて被ってじゃんけんぽん対決じゃねぇよ…」

作者、霜月サヤが思わず呟いてしまった原因……それは

「チャイナァァァァァ！！」

「サドォォォォォ！！」

と乱戦になっている味方のはずの沖田と神楽。

「なァ、リオ～」

「ちょ…銀時！？酔っているの！？いつ、お酒を飲んだの！？」

とリオの体にベタベタと触っている、すでに酔っ払いの銀時。

「良かったですね、メガネがグッズ化になって」

「良くねぇよォォォォォ！！」

「ツッコミしか取り柄がない奴は黙ってろよォ！」

妙が持ってきた卵焼きを新八に投げつける由利。

もちろん、これを受けた新八は戦闘不能となった。

「知ってます？キャラクター人気投票の途中結果」

「いや、知らんが…」

「今現在、合計で約８０票ありますけど、メガネとゴリラはなんと０票ですよ。しかも、あの地味なジミーに負けているんですから、笑っちゃいますわ」

「ヌァァァァ！？」

気絶から復活したのに、ゲストなのに『妖と夜叉』の人気投票の途中結果をなぜか知っている由亜から精神的ダメージを受ける近藤。

「だいたい、あなたっていう人は…」

悠字から罵倒されてまくり、言葉を返せずにいる土方。

それらをのんびりと、いつの間にか用意されていたお茶を飲みながら見ている遊馬と蘿蔔がいた。

「もう何？何これ？」

どう見ても収拾がつかないと思えるくらい、叩いて被ってじゃんけんぽん対決がやれそうにない。

「……もう、終わっちゃっていい？」

誰も聞いていない中、サヤはそう問いかけた。

その後は、このための会場が神楽と沖田の乱戦によって半崩壊した。
そして、このコラボも半強制的に終わるのであった。

今度こそゲームの開始！になるのか？（後書き）

次章は、坂井ゆらさんのオリキャラとコラボ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3421z/

妖と夜叉 コラボ篇

2012年1月10日19時52分発行